T-3

実践者の視点から（も）音楽療法における研究の未来を考える

- 第 17 回世界音楽療法大会スポットライトセッションより -

生野里花（お茶の水女子大学基幹研究員）

「想定外すぎる役を頼まれると、一周回って引き受けてしまう」ということがありませんか？

ある日私の PC に、「バンクーバーの世界音楽療法大会のスポットライトセッション『音楽療法における研究の未来：トピックスと方法』の話者を引き受けないか」というメールが届きました。何かの間違い？なぜ私？と思いつつ、意外すぎて好奇心も抑えられなくなり、つい yes と答えてしまいました。

しかしふたを開けてみると、私以外の登壇者は大変な方々でした。ノルウェイ・グリーク音楽療法研究センター上級研究員で精神保健における音楽の効果と応用を専門とする M. Geretsegger さん、音楽療法の博士号、平和学と紛争解決の修士号を取得し、現在コロンビアで音楽療法の実践と大学修士課程を率いている M. Ettenberger さん、さらに、これまで音楽療法研究になんと 1600 万ドル以上の資金を獲得して来たというメルボルン大学教授の F. Baker さんです。これら「音楽療法研究のプロ」ともいうべき方々と同じテーブルで、「音楽療法研究の未来」を語る…やはり「何かの間違い」に違いありません。

でも、こうなったら観念して等身大でいこう、どうせなら、日本の実践者として今自分が一番強く考えていることを話してみようと思いました。それが、「実践者中心の視点に立つ研究を模索する」というテーマです。

実践者の間では、「研究」はなんだか特別な人のすることとして切り離されがちです。それは、忙しい、難しいというのもありますが、実は、日々の実践で大事に思うこととどこかすれ違っているような気がするからではないでしょうか。たとえば私は、自分に強い意味が感じられたある事例を、「もっと知りたい」一心で暗中模索しながら分析し、2019 年の当学会で発表し、2020 年の講習会でもお話しすることができました。でも、いざ実践者の目線に戻ってみると、やはりどうも知りたかったことから微妙に逸れてしまったような感じがするのです。それでさらに模索し、2 年後にはなんとアート作家と共同で影絵映像を創って、対話会を始めていた、という冒険を話してくる予定です。「普遍的な理論」と「局所的な事例」の直線的往復ではなく、「その『あわい』に位置する現場経験」に留まるような研究も拓けないだろうか、という提案です。

本講義では、他のすばらしい 3 人の登壇者の内容概略を含め、8 月帰国という時間の許す範囲で報告させて頂こうと思います。

■プロフィール

米国・日本認定音楽療法士、公認心理師。野花ひととおんがく研究舎　http://pirika.com/Nobana/　の下、フリーランスで実践、研究、教育を行っている。著書「音楽療法士のしごと」、共著「ケースに学ぶ音楽療法」、「静かな森の大きな木」、訳書 Bruscia「音楽療法を定義する」、Robbins「音楽する人間」他。

2015 年お茶の水女子大学にて博士号。現在、同大学基幹研究員、東海大学・放送大学非常勤講師、(株)東急イーライフデザイン下の高齢者ホーム音楽療法士。Voices: A World Forum for Music Therapy 編集委員。

独立系の音楽療法対話サークルを作ることにも注力しており、「野花の座」（音楽療法実践）、「ソフィア野花」（音楽療法文献の輪読/討論）、「ここのわ」（音楽臨床実践の研究、共同））を主宰。